



護持院原の敵討

森鷗外自筆原稿



特別
文庫14
A158



雑志ホトギス卅七卷一子
所載原稿。赤インキのルビ
も当時の同誌編輯者島田
青峯氏の筆にか



病氣ひやうきを「たので、寂さびしい夜寒よさむを一人ひとりで凌しのいだ。

は骨ほねの太ふとい、かつーりした行燈あんどうがある。燈心とうしんはサ化さくわ

薄暗うすくらくあつた、橙黄色たけいろの火ひが、黎明れいめいの窓まどの明あかり

二部屋ふたぶやと懸領けんりやうしてゐる。夜よはほ夜目よめの

さある。

障子しやうじの外そとは人のけしひがした。申し

紙かみ紙がみが終しまりました。 ~~紙~~

お

「お前は誰たれだい。」

小使こしやくでございませう。

三右衛門さんえもんは内うちから障子しやうじをあけた。手紙てがみを持つて来た

のは、名なは知らぬが、見識けんしつた顔かほの小使こしやくで、お 二十はたしよなるか

ちりぬの若わか者ものである。

受け取うけとつた封書ふうしよを持つて、行燈あんどうの前まへはすわつた

右衛門えもんは、先まづ燈心とうしんの花はなをサ化さくわして掃かき立てた。

出た。

三右衛門は思慮の事もなく跡を追つた。中の口

で出たが、もう相手の行方が知れない。痛手を負つた老

足は、牡羊の疾者よなはなつた。

三右衛門は

軍がサ明して来た。それとも命令で命令を辱まして、

屋へ引き返した。何より先は金箱の錠前を改めた。

3

4

異状もない。先づぬつたと思つた時、眩暈が強く起つたので、

左の手で夜具葛竹鏡を引き寄せ、それを先より掛つた。そ

して深い深い息を衝いてゐた。

物音を聞き付けて、最初も駆け附けたのは、泊番の徒目附

であつた。次いで目附が来る。大目附が来る。本締が来る。

三右衛門の妻子のゐる。三右衛門の妻子のゐる。三右衛門の妻子のゐる。

使が走つて行く。

三右衛門は精神が慥で、彼人等も向はれて、
返事を

した。自令は意趣遺憾を受け、覺は無い。白紙の

紙を持って来て、切つて掛つて居る。

表小使で

督相續の事を宜しく頼む。敵を討つてくれるやう

言つて貰ひたいと言ふのである。其間三右衛門は残念

ほとんぼす

4

残念だと度々繰り返して云つた。

現場に落ちてるた刀は二三日前作事の方で勤めてゐる五瀬

某が、詰所に掛けて置いたのを盗まれたのであつた。門番を調

べて見れば、卯刻迄は表小使龜藏と云ふのが、急用のお使

たと云つて通用門を出たと云ふことである。龜藏は神田久

左衛門代地の仲間口入宿富士屋治三郎が入れた男で、二十

歳の子である。下請宿は若狭屋龜吉である。表小使龜藏

おまこつつかひかめ

今新田の城主小笠原備後守貞謙の家来原田某の嫁

の妻なるを、麻布日が内陸の小笠原邸よりあるが、
れば間合はなして、酒井邸には来なかつた。

三右衛門は醫師が飾り物と言はるが、
房子供も、

中尾町の住人は手狭で、女抱が行き届くまいと云ふので、
町添邸の神某方で、三右衛門を引き取るやうに沙汰する

ほどくさす 6

た。これは山本家の遠い親戚である。妻子はそこへ附き添
つて往つた。そのうち、原田の女房も来た。

神某方で三右衛門は二十七日の寅の刻に絶命した。

其日の酉の下刻に、上邸から檢使が来た。徒目附、小人目附等、
手附が附ひて来たのである。檢使は三右衛門の女房、俵守平、

娘りよの口書を取つた。

役人 榎使の復命に依つて、西井家から沙汰があつた。三右衛

門が重手を買ひながら、病者の中を口まで進んで出たのは

平生の心得方宜しからぬと賞まわし、格式相當

儀可取行し、出ても養生をい

りた現場であつた、病者の人は、榎使の

某を見すられた。

二十八日は三右衛門の遺骸は、山本家の菩提所

堂前の遍立寺に葬られた。葬と出す前、神の方で三右

衛門が遭難當時は、持つて着けてみた物の都合と一時、大

小室忠伴宇平が、持つて帰る。袋であつたが、娘りよは切し請

うて脚差を譲り受けた。そして宇平がそれを承諾する

と、泣き腫らしておたりより目が、刹那の間、喜よか

やいた。

侍が親を殺害された場合は、敵討を—なくてはならぬ

ましてや三右衛門が遺族を取つては、その敵討が故人の遺

をうてゐる。そこで親族打ち守つて、度々評議を疑

末、御立天保五年申午の秋

た。

評議の席で一番執心は復讐がしたいと言ひ續けて、成功

いひ氣を真苛つたのは宇平であつた。色のサない、瘦せた、骨白の

ほと、ぎす 8

山

若者ではあるが、病身ではない。姪のりよは始終黙つて人の話を聞

ある。未亡人は頭痛持で、こんな席へは稀しか出て来たのが、出て

来ると、若し返討など逢ひばすまいかと心配してどうしてこん

な火難は遭つたことか尋ねり及してとどく[]であつた。日

か内渡り来る原田夫婦や、未亡人の實弟、櫻井須磨右衛門は、ソ

もそれを慰めようと骨を折つた。

然るにこの親戚一同がひどく頼みは思つてゐる。男が一人ある。

此男は本國姫路にゐるので、かういふ席には列することが出来ぬ。

か、訃言を接するや否や、甲斐の状をよこして、敵討ちは

助太刀をすくと拵つたのである。姫路には此男が

意氣揚子仕へてゐる。此男は本國姫路にゐるので、

廿四歳年四十五歳である。亡くなった三右衛門がたの

九つ違の實弟である。

10.

九郎右衛門は兄の訃言を得た時、すぐ主人意氣揚子願書

を出した。甥、女姪が敵討をするから、自分は留守を倅健藏子

委せて置いて、助太刀を出たいと云ふのである。主人本多意氣揚

は徳川家康が西井家へ附けた意氣揚の子孫で、武士道に心

掛の者、おれ人のので、すぐ九郎右衛門の願を聞き届けた。拵

は、訃言を接するや否や、甲斐の状をよこして、敵討ちは

いふちよ、九郎右衛門は意氣揚の子孫で、武士道に心掛の者、おれ人のので、すぐ九郎右衛門の願を聞き届けた。拵

金二十兩とを貰つて、姫路を立つた。それが正月二十三日の事
である。

二月廿五日九郎右衛門は江戸堀越町の中邸にある山本

平が宅に着いた。宇平を嫁、細川家の御殿と取つて帰つた。

嫁のりよが喜へた。沈着を頼む。

新しい叔父を見たばかりで、嫁も弟も安堵のほろほろ泣いた。

「まだらつちではお許は出んかい」と九郎右衛門は宇平に

うた。

うた。

「はい。まだなんの御沙汰もございませぬ。お役人方は伺ひましたか、

多分忘中だから御沙汰がないのだらうと申すことぞ。」

九郎右衛門は眉間は皺を寄せた。暫らして、大きい車は廻

りが「屏のう」と云つた。

それから九郎右衛門は旅の支度が出来たかと問うた。いづれ

お許が出てあらうと、宇平が云つた。叔父の眉間は又皺が寄つた。

長い間、い、はが、は、い、ろく、と

併し今度はなんとも言はなかつた。外の話を色々しつて、

お父は思ひ出さなやうに云つた。「あの支度ばのう、先へして

置いても好いぞよ。」

六日は九郎右衛門の兄の墓参をした。七日は濱町の

戸方へ、兄が末期の世話をなつたおれと云つて、神子往つた

の風の強い日で、丁度太郎右衛門が神子の内子である

田村の火事が始まつた。歴史に残つてゐる年軍の大火を

る。未の刻は佐久間町二丁目の琴平三味線師の家から出火して、

13

日本橋方面へ焼けひろがり、翌朝9時刻を焼けた。八時分三味線屋

からことと出し火の手がちりことんだ大火事と云ふ落首があつた。

濱町も堀越町も風下で、火の手は三つに分れて焼けて來るのを

見て、神子の内は人手も多いからと云つて、太郎右衛門は堀越町へ

と飛んで歸つた。

山本の内では太郎右衛門が指圖として、荷物は残らぬと云つたが、

申の下刻は中野一面が火になつて、山本

山本

けた。

あじ ほん じ
りよは 齋主人の 田川家の 邸 煙を 濡れ 駆け 附いたが、

と しまや 火子 たらと ぬた。 あが ない へ、 姉えさん 火

の中へ 逃げ ちや あい けねえ などと 云ふ ところ がある。 とう

者や 彌次馬 共の 肉 扱 された 身 軀 も なる なる こと だ

へ 火の子 が ぱら ぱら 落ちて 来る。 りよは 涙ぐんで 亀井町の 子

から 引き 返して しまつた。 内へ は めい 叔父が 宿所 へ 帰つて

ほとん ぎす 2

荷物 を 片附 けて みる だ。

は まちや 漆 断も 矢の 倉子 近い 方は 大部 分 焼けたが、 幸よ 酒井家の 漆 邸

は 焼け 残つた。 神戶家へ 軍々 世話 したる のは 多氣の 毒だと 云ふ ぞ、

宇平 一家は 矢張 遠い 親戚 まで 寄 添 邸の 山本 平作 方へ、

八日 辰刻 届き 難 した。

三右衛門が 遺族は 山本 平作 方の 部屋を 借りて、 夢の 中で 夢

見やう な こと 時 多つて、 夢 中 夢 中 夢 中

つて寝た切である。宇平は晩組として何やら考へておる。只一人
平作の家族は氣兼ねしなから、甲斐々々しく立ち御して
たが、午頃はなつて細川の奥方の立退所が知れぬたので、
見舞い 往つた。

晩よりよが帰ると、太郎左衛門が云つた。「おい。おれは
くは家なんぞはいらんが、若殿が旅に出て風を引かぬやうな、
丈ばしと遣らんではならんぞ。おれは宇平と若殿々々と呼ん

で押揃つてゐるのである。

「はいと云つたりよは、其晩から宇平の衣類は手と着けた。

九月はよりよが旅支度しつた物を買ひ出した。九郎左衛門が書附

よと渡したのである。けよは風が南を襲つて、珍らしく暖いと思つてゐ

ると、雨の上刻よ又檜物所から出火した。をとつひ焼け残つた町家

が、又此火事で焼けた。

十日よは又寒い西北の風が強く吹いてゐると、正午よ大名小路

の松平信孝守の上邸から出火して、橋本町が廿二口へ掛た

た。

續いて十日も十一日も火事がある。物價の高いのは、父

が引き續いてあるので、江戸中人心恟々としてゐる。山本

方で商人は注文した、せしばありの品物も、思ひ掛けた手

出来て、りよが幾らも、之度になか、

い。

或る日九郎在衛門は烟草を飲みながら、りよの裁

るのを見てゐたが、不審らしい顔をして、烟草を下に置いた。「なん

ほとゝぎす 14

い。そんなちうほけな物を拵へたつて、しやうがないぢやないか。若

殿ばのうほでお出るな、からなあ。」

りよは顔を赤くした。「あ、これはわたくしので。」 繼つてゐたは

女の脚絆甲掛である。

「なんだと。」 お父は目を大きく睨つた。「お前も武者修行に出る

のかい。」

「はい」と云つたが、りよは縫物の手を止め、

縫物の手を止め、

ふんといふて、叔父は高久しく女性の顔を見てゐた。それ
てめ、いふた。それは駄目だ。お前のやうな可愛らしい女の子
連れて、どこまで往くか分からん旅が出来た。敵はど
出逢ふか、何年立つて出逢ふか、まるで南がきいた。己と宇平
只それを押して行くのだ。見附かつてお前も知らなければ
ないか。

仰やう通、どこでお逢ふか知れませんか、まうと二人へ
お知らせようとなることが出来ませうぬ。それは江戸から参つてお侍
ほといぎす 15

(16)

まうとお待よなることが出来ませうぬ。罪のないやうな、猿狛らしい
やうな、うりくした目で、微笑を帯びて、叔父の顔をちつと見た。

叔父は少めらず、狼狽した。な程。それは時と場合とよ依

る事で、わしもまうとは云ひ兼ねぬ。出来る事なら、どうも
もしてお前を其場へ呼んで遣ふのだ。萬一向は合はぬ事がある
なら、それはお前が女を生れたお前だと、諦めてくれるより外
ない。

「それ御覧遊ばせ。わたしはとうしてもその萬一の事

ないやうにいたしたうございませぬ。女は連れて行かれぬと仰

下さり、わたしは尼子あつて参ります。

「まあ、さう云ふな。尼子も女ぢやあらなあ。」

りすは涙を繼物の上落し、黙つてゐる。お父上

面詞を盡しと慰めながら、女は連れて行かぬと、母事だけは、

~~きうげり~~言ひ渡した。りよは涙を拭いて、繼

ひさした脚絆をそつと側へあらた風爐敷色の中へしまつた。

酒井雅樂頭は月番老中久保加賀守忠と三奉行と伊

濟の上で二月二十七日附を以て、宇平、りよ、九郎右衛門の三人は死

大目付連累の證文を度して、敵討を許した。首尾よく敵討す

果せたり、帰参させよ。若し敵討せられぬうち、敵が死

んたら、その死んだと云ふ證據を持つて復命すが、かぬいと云ふ

た へん こちがせ。

伏である。二人は手置を奉置し留守へは扶持田を以て
下がる。山本一家はりよはお許は出ても、敵を捜しよは旅立た
ぬこととちうて見れば、これで未亡人とりよとの、江戸での居所を
めて置けば、守平九郎右衛門とは出立することが出来た
ある。

りよは小笠原邸の原田夫婦が先引き取ることとなつた。未亡
人は頼濟の上で、榎井里方、榎井須磨右衛門で保養することと
ちうた。

ほととぎす 17

さていよ、守平九郎右衛門の二人が門出をしよつとちうたが、二人
共敵の顔を見覚えを識らぬ人相書なげをたよりとするのば、い
かすも心細いので、入宿の富士屋や、諸宿の若狭屋へ往つて色々
問ひ質りたが、これと云ふ守平の事実は聞き出されぬ。それ
は容貌が今のらぬばかりでなく、生國も紀州とは云つてみだが、確
とちうとは分らぬらしい。只酒井家は長平公する前には、上野國
高崎に及たことがあると云ふ丈である。

其時山本平作方へ宛廻尋ねて来た男がある。此男は近江國

井原の産で、少い時江戶より出て、諸家子仲間奉公をしてゐる。

ちよ、丁度龜藏としよ、酒井家の表小使をして、三右衛門

世話もなつたこともあつたので、若しお役も立つやうなら、幸今は

家のら暇を取つてゐるから、敵の見掛人として附いて行つて

三右衛門である。名は文吉と云つて、四十二歳なる。體は丈夫で、

者の仲間には珍らしい、實直な男だと云ふことが、一目見て分かつた。

九郎右衛門が會つて話をしと見て、すぐ宇平の家來

召し抱へるとよした。

宇平、九郎右衛門、文吉の三人は二十九日、菩提所遍立寺か

ら出立すること極め、前濱町の山本平作方を引き揃つて、寺

へ往つた。そこへは病氣のまだ好くならぬ未亡人の外、りよを始

親戚一同が集まつて来て、先づ墓参をして、それから離別の盃

を酌み交した。住持は其席へ蕎麥を出して、これは手討の

ちよ、三右衛門、文吉、九郎右衛門、宇平、菩提所遍立寺、

しんちてこさしませしと、茶番めい左口上を言つた。親戚は笑
ひ興じて、只一人打ち萎れてゐるりよと陣持を促し立てて帰つた。
寺よ一夜寝て、二十九日の朝三人は旅立ちつた。文吉は荷物
負つて一歩踏み附いて行く。彌吉が本陣前へ来たとき、
りよと、最初上野国高崎とさして往くのである。

九郎右衛門も宇平も文吉も、高崎をさして往くのよ、彌藏が寺
よぬさうだと云ふ氣はなまい。どこをさして往かうと云ふ見當が附かぬ
ので、先づ高崎へでも往つて見ようと思ふよ過ぎない。彌藏

と云ふ、無頼漢とも云へば云れぬ、住所不定の男のありのよ、日本國中
で捜さうとするのは、米倉の中の米粒一つを捜すやうなののである。
どの俵も手と着けて好いか分らない。併しそれ程の覺束ない事
か、一方から見れば、是非共為遂げなくてはならぬ事である。そこで
一行は先づ高崎と云ふ俵をほどいて見るとよ一た。

高崎では踏跡が知れぬので、前移へ出た。ここには榎所の政淳
寺よ山本家の先祖の墓がある。九郎右衛門等はそれを見つて

或わと介つた。そこから廿四日に出で、五六日ぬた。そこを廿四日

の境を越して、鬼玉村三日有た。三ヶ年山に登つては、三峰権現

新願と竹籠のた。八王子を経て、甲斐國に入つて、郡内、甲府

二日、廻つて、身延山へ参詣した。信濃國では、上諏訪から

峠を越えて、上田の善光寺へ参詣した。越後國では、高田より

二日、柏崎、長岡。一日、三條、新潟。四日有た。そこより加賀街道へ

轉じて、越中國へ入つて、高山三日有た。上邊は凶年の影響で

うこと甚かしくて、一行は麥より芋、大根を切り交せた飯を食つて、

農家の土間は竹を敷いた寝た。此驛國では高山二日、美加

団では金山一日有た、本宿路を太田へ出た。尾張國では、犬山より

名古屋より四日有た、東海道を宮へ出て、佐屋を経て伊勢國へ入り、

業名、四日市、津と廻り、松坂三日有た。

一行が二日以上泊るのは、目的の草臥休を此こともあるが、大抵何

か手掛かりがありさうと思はれるので、特別搜索をするのである。松坂

では、飯町目代、米橋某と云ふのがゐる。九郎右衛門等の言ふ

ことを親切に聞き取つて、綿密な調べをしてゐた。禁の調

へ上げた事案を言つて聞かれた時には、一行は暗中の燈火を

めたやうな気がしたのである。

松坂子深野屋佐兵衛と云ふ大商人がある。そこへは赤伊田

能野浦長嶋の逆師定右衛門と云ふ者が毎日魚を送つてよす。

縁で佐兵衛は定右衛門一家と心安なつてゐる。然るに定右衛門

の長男龜藏は若い時江戸へ出て、音信不通なつたので、二男定右

をたよりよしてゐる。其龜藏が今年

正月二十一日、落魂の體で深野屋へ尋ねて来た。佐兵衛は「前

ほどノ書き

21 禮禮と身取瀧つて

つうを不孝者~~と云ふ~~と云ふと、親父様は知れぬ

留めて置くことは出来ぬと云つた。後には、龜藏は龜藏

はずごく深野屋の店を立ち去つたが、それを見た者が、あれは

紀州の能藏と云ふ男で、なんでも江戸で悪い事をして、逃げ来る

た~~の~~だらうと評判した。

後深野屋へ向えた所を依ると、龜藏は正月二十四日、

米定右衛門が、はばかたの~~小父~~林助の家に来て、置

いてくれと頼んだが、林助は負せしと云ふ、人を置くことが出来

と云ふと、父定右衛門が許へ帰れと落めたる。知人よたすうとし、

それか、慥はぬ候もなると、始て親戚をおとづれ、親戚よことわりを、

龜藏はやさやう親許へ帰る氣にならうし。定右衛門

は二十八日は帰つた。

二月中旬、龜藏は江戸で悪い事をして帰つたのだからと、

か、松坂より定右衛門の所へ向うた。定右衛門が何そ一ためと問ひ

た時、龜藏が同上の男の劍と負けたと云つた。そこで定右衛門

問と林卯を、龜藏を坊主よと、高野山に登らせるとよした。

二人が剃髪した龜藏と三浦坂まで送つて別れたのが二月十九日の事

である。龜藏は其時茶の辨慶結の本綿綿入を着て、真甘本綿

帯と締めの藍の股引を穿いて、脚絆を帯ててゐる。懐中よは

一雨持つてゐた。

龜藏は二十四日は高野領清水村の又兵衛と云ふ所の家に泊

つて、翌二十三日も雨が降つたのを滞留した。そして二十四日は

高野山に登つた。山で逢つたものもある。二十六日の夕方よは、

げきん

下山と橋本をみたのそ人が見た。それからは行方不明な
つてゐる。多分四国へでも渡つたかと云ふことである。

松坂の目代は此頃末を聞いた時、この坊主になつた定右衛門

俣龜藏が敵だと云ふことよ疑を挟むのは、主従三人の中、

おら。宇平はすぐ四国へ尋ねま往かうと云つた。併

衛門がそれを止めて、四国へ渡つたかも知れぬと云ふのは、根拠のない指

量である、四国へもつれ往くとと、先づ手近な土地から捜すが好

いと云つた。

一行は松坂を立つて、武運を祈るたのは参宮した。それから南を

と、東海道と大坂へ出て、ここより二十三日を要した。其向は松坂から

便がある、紀州の定右衛門が俣の行末を心配して、氣病でしつた

つたと云ふ事と聞いた。それから西宮、兵庫を経て、播磨国へ入

り、明石から本國難路を出て、魚町の宿は三日をた。それから備前

国へ入り、岡山を経て、六月十五日の夜舟に乗つて、いよいよ

四国へ渡つた。松坂以来九平右衛門の捜索方針は討と、稍石

満ちる一色を見せながら、詰まりは意志の堅固を、兼ては浮沈
の無い親父の威厳せられて、附いて歩いてゐた宇平が、此時急な活
氣を生じて、舟の中を夜更けの更けるまで話し続けた。

十六日の朝舟は讃岐國丸龜に着いた。文吉は松尾を尋ねて
置いて、二人は象頭山へ祈願に登つた。すると斎藤人が丸龜に
ありげな、他所者の若い僧を見たと言ふ話を聞いた。宇平は
附けたやうな氣をなうと、美刻の山を下つた。丸龜に帰つて、文吉
を松尾の呼んで僧を見させたが、別人であつた。

伊豫國の銅山は諸國の惡者の集まる所だと傳へて、一行は銅山を二
日捜した。それから西條の一日、小春、今治の二日ある、松山から道後
温泉に出た。ここへ来るまで、暑を侵して旅行をした宇平は、
留飲痴痛を悩み、文吉も下痢して、食事が進まず、骨が
のど、湯町で五日の回復した。大骨がよくなるまで、中丸
洲を二日捜して、八幡濱に出ると、病後を押して歩いた。宇平
が力抜けがして煩つた。そこで五日間滞留して、やうやく九州

舟の舟に乗るところが出来た。四国の旅は空しく過ぎたのである。

舟は豊後国佐賀郡に着いた。鶴崎を経て、肥後国に入り、

廿餘里(新願)多つて、熊本を三日、高橋を三日、櫻を三日、

國崎を度つた。その二日、長崎へ出た。長崎に来た。

敵うい僧を嶋原で見たと云ふ話を聞くと、引き返して山へ

ね(印)た。それから熊本を三日、宇土を二日、八代を一日、南工

日尋ねて、再び舟で肥前国温泉山嶽の下の港へ渡つた。すくと長

崎から来た人の話、敵うい僧の長崎に来たことと聞いた。長崎上流後町の一向宗の寺に、善善寺と云ふのがあり、そこへ二十歳前後の若い僧が来て、棒を指南と云ふのである。一行は又長崎行の舟に乗つた。

長崎に着いたのは十一月八日の朝である。舟引地町の紙屋と云ふ家

は泊つて、町奉行福田某は尋人の事を頼んだ。ここで聞けば、善善寺の客僧はいよく敵うい僧に

何か人目を怪しむわけがあると云つて、町外不出で暮してゐると云

ふ。何か人目を怪しむわけがあると云つて、町外不出で暮してゐると云

ふのである。親切な町年守は、若し取り逃がしはなすぬと云つて、
盗賊方を二人同行させることゝした。町で金術師を頼りて、
小川某と云ふものも、町年守の話に聞かされて、是れ其場を立ち去る。
場合を依つては、即ち太刀がしらいと申し込んた。

九郎右衛門、宇平の二人は、大村家の侍で、棒の修行が、
懇望するものと云つて、勧善寺の弟子入の事を言ひ入れた。安
僧は承引して、あすの巳刻に面會しようと言つた。二人は喜び勇ん
で、文吉を連れて寺に往く。小川と盗賊方の二人とも跡を續く。さて

文吉は頼合園を教へて、客僧の面會して見ると、仙も穿らぬ人が、
日頃あつた。ヤリ／＼其場を取り繕つて寺を出たが、はるばる
る中、宇平は殊に落膽した。

一行は、~~新~~ 福田、小川等、神を言つて、~~新~~ 長崎を立つて、大村の
五日暮るゝ依賀へ出た。此時九郎右衛門が足痛を起して、杖を衝いて
歩くやうになつた。其後園では久留米を五日尋ねた。其前園では
先づ太宰府天満宮まで詣りて祈願をせよ、博多、福岡は二日の
て、其前園小倉に舟に乗つて九州を離れた。

長門國下関は舟で渡つたのが十一月六日であつた。雪は降つ

来る。九郎右衛門の足痛は次第に重なるばかりである。とう

平と文吉とで勧め、九郎右衛門を一旦姫路へ帰すこと

郎右衛門は羽池りながら下関から舟に乗つて、十一月十二日の朝

國室津に着き、其日うち、姫路の城下平の町の稲田屋に

入つた。本意と違はるも旅中の心得である、舟をたると果すまで

俸の

宇平は九郎右衛門を送つて置いと、十一月十日は文吉を連れて下関を

立つた。それより周防國宮市二日ある、室積を経て、岩國の錦帯橋へ

出た。そこを三日搜して、舟で安藝國宮嶋へ渡つた。廣嶋は八日ある、

備後國に入り、尾の道、鞆は十七日、福山は二日ある。それより備前國岡

山を経て、九郎右衛門の見舞亭姫路に立ち寄つた。

宇平、文吉が姫路の稲田屋で九郎右衛門と再會したのは、天保六年

乙未の年四月二十日であつた。丁度其時、廣岸山の神主谷口某

あつた

あらぬた編歴して見たが、敵はあつて見附らぬ。此按排は

々が本意を遂げぬのは、いつの事か合らぬ。事よさら此儘

と吞んで道路のたれ死とするかも知れない。お前はそれまで討

られぬ程の親切を盡してくれぬのだから、どうも此上しよ

くれとは云ひ兼ねる。勿論敵の面影を見識らぬ我々は、お前は別

ては困るに燃違ないが、最早是れ及ばない。只運と天に任せて、名告

り命お目を待つより外ない。お前は忠實此上もない人であるから、これ

から主取をたらう、どんな立身も出来さう。どうぞここで別れてくれと

云ふのであつた。

九郎右衛門は兼て宇平を相談して置いて、文吉を呼んで申渡した。

宇平は側で腕組をして聞いてみたが、涙は頬を傳つて流れてゐる。

黙つて衝つ伏して聞いてみた文吉は、詞の切れるのを待つて、頭を

擡けた。睜けた目は異様な輝いてゐる。そして一聲「檀那、それは

「ひまや」と叫んだ。心は激して詞はしどろであつたが、文吉は大

併しもう日本全国

凡そんを事を言つた。此度の春公は當前の春公ではない。敵

討の供^たに立つありは、命^{いのち}はよいものである。お二人が首^{くび}尾^び好^{よし}

本意^{ほんい}を遂^{ついに}げられれば、萬^{よろこ}一^{いつ}敵^{たつ}は多^{おほ}勢^しの惡^{わる}者^{もの}でも加^か掛^か拵^ぢ拵^ぢ

返^{かへ}討^{うち}も逢^あはれれば、一^{いっ}しよ^{しよ}に討^{うち}たれども、其^{その}場^ばを逃^{のが}れて、二^に重^{じゅう}

討^{うち}つ外^{がわ}なき。足^{あし}腰^{こし}の立つ向^{むか}は、よしやお暇^{いそ}が^ご出^でても、影^{かげ}の形^{かたち}

ふやうに離^はれぬと云^いふを^をあつた。

流^{なが}石^{いし}の九^く郎^{らう}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}も詞^{ことば}の返^{かへ}しやうがなかつた。宇^う平^{へい}は廿^に種^{じゅう}つた思^し

あつた。 30

それゆゑは三人^{さんにん}が津^つ國^{くに}屋^やを出^でて、木^き賃^{せん}宿^{しゆく}に起^{おこ}臥^ふ事^{こと}することとなつ

た。もうどこをさして往^いて見^みようとする所^{ところ}もないで、只^{ただ}巴^はは^は勝^{かち}る位^{くらい}

の考^{かんが}で、僞^{いつはり}傳^{でん}を願^{ねが}ひ神^{かみ}佛^{ぶつ}の加^か護^ごを念^{ねん}じなむら、日^ひごとく申^{まを}申^{まを}を御^ご

廻^{まわ}してゐた。

そのうち大^{おほ}叔^{しゆく}は咳^{せき}逆^{さか}が流^{なが}行^りくと、木^き賃^{せん}宿^{しゆく}は咳^{せき}をす人^{ひと}だらけと

なつた。三^{さん}月^{げつ}の初^{はつ}子^し宇^う平^{へい}と文^{ぶん}吉^{きち}とが感^か傷^{やう}染^{せん}して、執^{しやく}を出^でして寝^ねた。九

郎^{らう}右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}は自^{おの}命^{のち}の賣^うつた錢^{ぜに}で、三人^{さんにん}が一口^{いこう}死^しでも殊^{こと}を啜^{すす}るやう

いづれか

とある。四月の初は二人が本復すと、こん度は九郎右衛門が
た。體は嚴重でも、筆を取つてゐる。容體の二人より悪い人
の好い醫者を頼んで見て貰ふと、傷害だと云つた。それは五郎が
の、譯語より、こら待てたの、逃がすよかたのと叫んだら、
本宿の主人が迷惑がるのと、文吉が宿の主人に、病人を
とるうちよ、急劇であつたわ、早も五郎右衛門の強い體は少
い回数で病氣は打ち勝つた。

五郎右衛門の恢復したのと、文吉は喜んだが、こゝよ今一つの
難儀が出来た。それは不審から機嫌の変わり易い宇平が、病後
に際立つて精神の變調を呈して來たことである。

宇平は常はおとなしい性である。それよどこか世馴れない、
やりした所があるのよ、五郎右衛門は若殿と緯號を付けてゐた。
此若殿は、
希しい草葉の風は、
麻酔くやうよ、
何事をも、
強く感

動する。そんな時は常蒼い顔は紅が滲して来て、別人、
のやうな自辯となる。それが過ぎると反動が来て、沈鬱
なる。頭を低れ手と拱いて黙つてゐる。

宇平が此性質は、叔父も文吉も慣れてゐたが、今の様
は律程それとは違つてゐるのである。朝夕平穩な時がなく、
つと、始終興奮してゐる。苛々したやうな起居振舞をする。

それよりつものやうな発揚の仕態となり、饒舌とすることは
おへり

絶て無い。寧沈黙勝たといつてもぬい。只興奮してゐるため、
瑣細な事も腹をたてて。又何事もないと、わざと人を挑んで
詞尻を取つて、怒の動機を作る。さて怒が生じたところで、それ
をあらはに発動させず、口小言を言つて拗ねてゐる。

かういふ仕態が二三日続いた時、文吉は五郎右衛門と言つた
若檀那の御様子はどうも愛ぢやございませぬか。宇平の事
を、
若檀那は若檀那と云ふはなつてゐた。

五郎右衛門は氣も掛けぬらしく笑つて云つた。若殿が。

あの御機嫌の悪いのは、旨い物でも食べせると直るのだ。

五郎右衛門のかう云つたのも無理はない。三人は日ごと

と見合つてゐる氣が附かぬが、困窮と病病と西朝旅

の三つの苦難を嘗め盡して、誰も誰もどれどれ

と立つた日々俵はななくちてゐるのである。

文吉が此話と一た聖日の朝であつた。相宿のりか

れ、穰子出た跡で、宇平は五郎右衛門の前へ膝を進めて、
何か言ひ出さうと又黙つてしまつた。


どうしたのだいと叔父が云つた。


實は少し考へた事があるのです。

「なんでもぬいぢうさう云へ。」

「をぢさん。あなたはソウ敵は逢へると思つてゐますか。」

「それはお前も分るまいが、己も分らんのだ。」

「さうござう。蜘蛛は  網を張つて蜘蛛の掛かると待

つてみます。あれほどの蜘蛛でもぬい  のだから、平氣で

つてみるのです。若し一匹の極まつた蜘蛛を取らうとするのなら、

蜘蛛の網は役立ちますまい。わたしはあつと僥倖

していつまでも待つのが厭子ぢりまーた。

「随分己もお前もカク歩いて見たぢやないか。」

「ええ。それは歩く子は歩きましたか」と云ひ掛けて、宇平は

黙つた。

「ばてな。歩く子は歩いたが、何が悪かつたと言ふのか。構はんか

ら言へ。

宇平は矢張り黙つて、祖父の顔とちつと見てゐたが、暫く

して云つた。「とちさん。わたし共は随分歩く子は歩きました。併

し歩いたつてこれは見附からないのが當前かも知れませんが、ちつと

して網を張つてみたら、来て掛かつてはあつません、歩いた

つたつて、打つ附かうないかも知れませぬ。それと先へ先へと考へ

て見ますと、どうも妙です。わたしは裏な心持がしてあります

せん。宇平は又隣を催めた。おぢさん。あなたばどう

そんな平氣な様子をしてゐられるのです。

宇平が最後の詞を聞かれた時、お父は非常な注意の態

と以て聞いてゐた。さう思ふのか。よく聴けよ。それは杖

運が拙くて、神も佛も見放されたり、お前の言ふ通りだ。

足かん

人間はさうしたものではない。腰が起つては歩いて捜す。病氣をなれ

ば寝てゐて待つ。神佛の加護があれば、敵は逃げられる。

歩いて行き合ふかも知れぬが、寝てゐる所へ来ても知れぬ。

宇平の口角には微笑が閃いた。おぢさん。あなたは神や

佛が本當に助けてくれるのだと思つてゐますか。

土郎右衛門は物に動せぬ男なのよ、これを聞いた時は一種の

氣味悪さを感じた。うん。それは分らん。命がらんのか。

神代
神代

宇平の態度は、~~平~~不器用さで、~~平~~恬然としてゐる。ソレも興奮の

は違つてゐる。さうでせう。神代は命からぬりです。寧ろわたしは

今までしたやうな事は四蛇の、わたしの勝手はじようかと思つて

あきす。

土郎右衛門の目は、~~大~~大きく開いて、眉が高く揚がつたが、見ると

蒼ざめた顔は血が升つて、拳が固く握られた。ふん。そんなら敵

討は四蛇です。のめ。ほとほとす

宇平は軽く微笑んだ。珍らしくお父をおこらせたり満足したらし

い。さうぢやありません。龜藏は憎い奴ですわ。若し出合つたら、

ひどい目撃させて置ります。だが押すのも待つのも駄目ですわ。

出合おまをばあいつの事なんか考へずゐます。わたしは晴かま

しい敵討をしようとは思ひませんわ。即太刀もいりません。敵が知れ

れば知れる時知れるですわ。見、~~人~~人ものいりません。文吉は

あつちあなたの家来をとお使下さいます。わたしはお暇

あつちあなたの家来をとお使下さいます。わたしはお暇

いたす。す。す。

九郎右衛門が怒は發すやおや忽ち解けて、宇平の

と聞いてある間は、しつもの傍にいぢさんになつてみた。只何

も強ひて笑談を取り出す癖のちが、珍らしく生真面目な

あ。だけであ。

宇平が本宿の縁側を降りる時、叔父は「おい、宇平、待て」

と舌を掛けたが、宇平の姿は「どおか往つてしまつた。もう見えなかつた。係

しこれ切みなくちううとは、叔父は思は「あつた」。

夕方、文吉が帰つたので、九郎右衛門は近所へ往つて宇平と

手あて陣取來いと云つた。宇平は折々の若い者の象棋とさ

てある所などへ往つた。最初は敵の手掛かりを聞き出さうと

て、雑談を耳を傾けてみたが、後には只何となくよそ

話をしてゐたのである。文吉はさういふ小家を尋ねて見

た。併し、宇平はるなつた。其晩には遅くなるまで

九郎右衛門が起きてゐて、宇平が帰るのを待つたが、

おれとうく帰らなめうた。

文吉は宇平を尋ねて歩いた序は、ふと玉造の豊空橋

の霊験の話を聞いた。どこの誰の親の病気が直つたとか、

この誰は迷子の居所を知らせて貰つたとか、若い者が評判

し合つてゐたのである。文吉は九郎右衛門のことやつて

行水と身と潔めて、玉造に掛つた。敵のありあつた宇平の行

方とを伺つて見ようと思つたのである。

稲村の社に來て見れば、大勢の人が出入してゐる。稲村

敷へられぬ程多く立ててある、赤い鳥居が

群集はその赤い洞の中、押合は

り、茶店が出来てゐる。汁粉屋がある。甘酒屋があ

る。赤い洞の両側には見せ物小屋や、おもちや店やらが出

る。洞を潜つて社に入ると、お神主が

つて、番附札をわたす。伺を立てる人、其番附順と呼び

るのである。

稲村の社

文吉は持つてゐただけり錢を皆お初穂に上げた。併し
順番がなかへ来ぬのぞ、とうとう日の暮れるまで腹を
~~待~~待らう。何も食はずに腹がへつたと思はれぬ。あ
である。暮六つが鳴ると、神主が出て残りの番舞の方
朝お出なさうと云つた。

次の日は未明に文吉が社へ往つた。番舞順は文吉より
前あり、まだ来てをらぬ人があつたので、文吉は思つたより早
く呼び出された。文吉が沙を窺と埋めて舞みながら待つてゐる

と、これと思つたより早く、神主が出て御託宣を申し取り
次いだ。「初めの尋人は春頃から東國の繁華な土地にある。
後の尋人の事は御託宣が無い」と云つた。

宇平は玉造から急いで帰つて、御託宣を九郎右衛門に話
した。
九郎は右衛門に聞かされた。さうか、東國の繁華な土地
と云へば江戸か、いかゞ龜藏が構着でも、うめと江戸はだ

一とみまの敵討に出たと云ふことは噂も聞いたが知

れぬが、それともし親類で氣を付けてあるものもある

だから、どうも江戸へ歸るさうには早はれぬ。おい。文吉。

前神主一杯食はされたらちやないかい。後の子人が知れぬ

そのお、お初穂がもう一度貰ひたいのちやぢりか知らん

文吉はひどく物骨なかつて、九郎右衛門の詞を慮るやうな

し、どうぞさう言はずに御託宣を信する氣になつて世々

いと頼んだ。

(4)

九郎右衛門は云つた。い。己は稲荷様を疑ひはせぬ。六

どうも江戸へはなさうは思ふのだ。

かう云つてある所へ、本宿の亭主が来た。家主の所へ

呼ばれて、江戸から来た手紙を受取つて見たら、山本様

へのお手紙であつたと云つて、一封の書状を出した。九郎右

衛門は受け取つて見ると、山本字平、同九郎右衛門、

山本字平、同九郎右衛門、同九郎右衛門、同九郎右衛門、

何事の用事かと無氣が急いで、九郎右衛門が封を切つて批
く手紙の上よ、乗り出すやうよ、せうはあつた。

敵討の行が立つた跡で、故人三右衛門の御未亡人は、

親方 柳井 有磨 右衛門の家で持病の頭痛の直つのを待つ
あつた時、かゝるたつと、四邊が静まなつたつと、たぬ子、

頭痛が軽く、實に須磨右衛門は

親切なはしと云ふが、世話ばかりならせもるふくの、未亡人は
り忙しなない、申公口をと云つて捜して、とうとう小川町廻格降の宇

衆大澤 右京大夫 基昭が奥に使はれよとよなつた。

宇平の婿りよは、叔母堀原田方より引き取られて、墓参の時

は、櫻を賣る、女房の世間話、耳を傾け、敵の
あつたを聞き出さうとて、己心も明けた。そこで所々一

二箇月づつ奉公してゐたら、自然手掛かりを得たつきよもなう

と思ひ立つて、最初は本所の或る家へ住み込んだ。これは遠い

親戚に當るので、奉公人やら客合やら合のりぬ待遇を受けて、茶

の手傳と一たのこある。次は赤坂の堀と平小家の奥へ、大

が勤めてゐるので、そこへ手傳に往つた。次は麻布の或る

奉公した。次は本郷の寄合衆本多帯刀の家來より、い

があるので、そこへ手傳に往つた。こんを風は奉公先を取り替へて、

天保六年の春は神曲の寄合衆酒井龜之進の奥に勤めてゐた

未亡人よりよも敵のありかを聞き出さうと思つてゐた。中よりよは

晝夜それと心を碎いてゐたが、どうも手掛かりがなかつた。九郎左

衛門や宇平から便が絶々なるので、江戸でも何一つしでかした

事もない。女子達の心細きは言はう様があつた。

月日が立つて、天保六年の五月雨の初、或る日未亡人の里

方の櫻井須磨左衛門が淺草の觀音を参詣して、茶店の腰を

掛けてゐると、今宵を歌んでゐた雨が又降りてきた。

へ駆け込んで雨を避け、^{ふたり}二連の船人^{おん}の骨の男が^ああるそれが小舟
のなつのを待ちながら、軒は立つてこんな話をした。

一人が云つた、「お前は話さうと思つて忘れておたか、^{ゆづ}神田

だつた、丁度今のやうな^あ雨で雨は降り出されて、酒向屋の^ああ

帰まうてゐる外でしやがんでゐると、そこへ^あ駆け込んだ奴がある。見

ればあの酒井様もぬれ^あ龜ぢやあねえか。己はびつくりしたよ。ぬくづ

く、帰つて来やかつたと思ひながら、おい、龜と聲を掛けたの

だ。すると、えと云つて振り向いたが、人聲を聞かぬ、おいらあ

虎と云ふんだと云つたといつて、まだ雨がどしく降つておのよ、^あ馬
け出と行つてしまがかつた。

今一人が云つた。「ぢやあ又帰つて来やかのだ。太え奴だなあ。」

短磨右衛門は二人の聲を掛け、その龜と云ふ男は何者だと問う

た。二人は侍は糾さるのとひどく當惑の^あ様子であつたが、をとどし

の^あ暮る大舟の酒井様の^あお邸で悪い事をし逃げた仲間の龜藏

の事だといつた。そして、^あ最後は「なま、ちよいと見たのですか、

本^あ酒井と云ふ^あ虎と云ふ^あ男の

全人遠たつたかもしれまへんと言は定した。只見掛けたと云
だけの此二人を雨り押さへても、別は後より立ちきりていり、甚立
て竈藏は江戸を逃げられ、てはなりぬと思つて、
須磨左衛門は穂便の二人と立ち去らせた。

大坂で九郎右衛門が受け取つた井の紙は、櫻井から竈藏
の江戸はあつたを知らせ置つた手紙で、ある。
文吉はすいじ王造へお禮参り往つた。九郎右衛門は文吉の降

のを待つて、手分をして大坂の出口々々を廻り、
の行方を街道の加馬籠の立場、港の船問屋に就いて尋ねたのである。
併しそれは皆徒勞であつた。

九郎右衛門は是れなく御の事と思ひ棄てて、江戸へ立つ支度
といた。路銀は費ひ果しとも、用心金と衣類腰の物と手は着
け、九郎右衛門は花色木綿の單物と茶小倉の帯を
締め、甘麻綿の野羽織を着、持物として、兩刀を手挟ん
だ。持物はや島色ごろふくの懷中物、原本綿の白身紙袋、十手

繩あはである。文吉あきちも取つて置いた花色の半物はんぶつは御納戸ごのりやの帯おびと
めく、十手て軍繩あはを懐中くわうちうした。

本貸宿ほんかじの主人しゅじんは社金しゃかねを遣り、津つ田屋でんやへは挨拶あいさつを立ち

つて、九郎くわらう左衛門ざゑもん主従しゆじゆは六月二十日の夜舟よふねで、伏見ふしへ

つた。三十日にじゅうは大暴風たいぼうふうで坂さかの下したは半日はんじつ留められた外ほかは、道中みちちゆう

の障さやうもなく、二人ふたりは七月十日しちがつじゅうにちの夜よ品川しんがはに着ついた。

十二日じふににち浅草あさくさの遍立寺へんたつじに往いつて、草鞋わらじの儘ままで三右衛門さんゑもんの墓はかに

45 寅とらの刻とき品川しんがはの宿しゆくを出でて、

参まゐつた。それから任持にんぢの面會めんかいと一いっ夜よの旅たびの疲つかを休やすめた。

翌よく十三日じふさんにちは孟蘭盆會ぼんおんくわんで、親戚しんせきのあが墓参はかまゐに来きる

九郎くわらう左衛門ざゑもんは任持にんぢ、口止くちどし、自分じぶんと文吉あきちとは庫裡くらぢりに隠かくれてゐた。任持にんぢをせめて

問とうたが、九郎くわらう左衛門ざゑもんは只ただ、謀まうは密ひそかるとたふとふと申まをしますか

らちと云いつた務む切きり、夢外ゆめがいの話はなしをまぎらした。墓参はかまゐに来きた

のは厚田あつた柳井やなぎいの女房にようぼう達たちで、巖いの武家ぶけ奉公ほうこうとてゐる未亡人みづかひや

りよは來ちつた。

成の下刻いけになつた時とき、九郎くわじろう右衛門ゑもんは文吉ぶんきちと言つた。「さあ、これ

めりま探たしは出るでのだ。見附みつきけるまでまではは足あしを搦に粉こな木ぎよと歩あく

足あしを搦に粉こな木ぎよと歩あく

遍へん立た寺てらと出でた二人ふたりは、浅草あさくさの觀音くわんおんとさうと往いつた。雷門かみど近ちかくな

つた時とき、九郎くわじろう右衛門ゑもんが文吉ぶんきちと言つた。「どうも坊主ぼうずはなつてさうぬ

らしいが、どんな風體ふうたいでも見逃みのがしがすなよ。どうせ立派りっぱな形かたち

はしとおないのだ。」

境内けいだいを迎むかへ、觀音くわんおんを拜をがんで、見識人けんしじんと櫻井さくらいと逢あはせて貫つらつた禮れい

と言いつた。それそれから藏前くらまへと兩國にこくへ出でた。けしは蓋ふた目め者ものいのみ、花火はなびがある

で、涼亭すずみやう見物けんぶつに出でた人が押おし合あつてゐる。提灯ちやんちんは火ひを附つける頃ころ、二人

は茶店ちやみせで暫しばく休やすんで、汗あせが少し乾かわくと又また歩あき出でた。

川かはも見みえず、舟ふねも見みえない。玉たまや鍔つばやと叫こゑぶ時とき、群ぐん

項こうを反ひして、群集ぐんしゆの陣じんの上うへの花火はなびを見るみる。

陣じんの下刻いけと思おもはれる頃ころであつた。文吉ぶんきちが背せ後ごから九郎くわじろう右衛門ゑもんの

袖を引いた。九郎左衛門は文吉の視線を辿つて、左手一歩前を行
く。背の高い男を見附けた。古びた中形木綿の單物、古びた花
色結博多の帯と締めてある。

二人は黙つて跡を附けた。月の明い夜である。横山町を曲る。町
町から大傳馬町へ出る。本町を横切つて、石町河岸から龍田橋
倉河岸へ掛る。次第に人通りが薄らぐ。九郎左衛門は手拭を
出して頬を拭き、わざとよろめきながら歩く。文吉はそれを扶け
る振と一と附いて行く。

神田橋外元薩持院二番原へ来た時は丁度子の刻であつた。往

來はもう全く絶えてゐる。九郎左衛門が文吉を見くばせ、二つの
體と一つの意志で働かすやうに、二人は背後から目ざす男を飛び
着いて、黙つて両腕を一つかり攪んだ。

何と一やあかると叫んだ男は、振り放さうと身をもがいた。
無言の人は釘接で釘を挟んだやうな腕を攪んだ。儘、
のかく甲斐道傍の立木の蔭へ、引き摩つて往かされた。



九郎右衛門は強烈な火を節光板で遮ったやうな聲で云つた。

己はとどしの草薙お主は討たれた山本三右衛門の第九郎右

衛門だ。國所と名前を言つて、覚悟をせい。

「そりやあ人違だ。おいらあ泉州産で、おん蔵と云ふりた。

そんな事と一た覚はねえ。

文吉が顔を見込んだ。「おい。龍。目下の黒痣

知つてゐる己がゐる。そんな一たを切るな。

男は文吉の顔を見て、草薙が霜よ毒びるやうな、がくりと

首を低れた。「ああ文吉

九郎右衛門はこれ文吉の手早く懐中から早廻を出して、男

を縛つた。そと文吉は言つた。「めうこは好いから、お茶の

水の酒井龍之進様のお邸へ往つてくれ。口上はかうだ。手前は御

高家のお奥に勤めが、りよの宿許から参りました。母親

か雷音で夜明を持つまいと申すこととでござります。どうぞ

格別の思召でお暇と下さつて、一目お逢合せ下さるやうにと、さ

うふのた。急いけ。
「は」と云つて、文吉は錦町の角へ駆け出した。

酒井龜之進の邸では、今宵奥のひげが隠れて、りよは

う部屋へ帰つて、寝巻を着換ふところである所であつた。

老女附の使が呼びよ來た。

りよは着換へぬうちで好つたと思ひながら、すぐは附いて

女の部屋へ上草履を穿いて、廊下へ老女の部屋へ往つた。

老女は云つた。「お前の宿から使が來てゐるがね、母親が急病だと

云ふことだ。盆ではあり、御多用の所だが、親の病氣は格別だから、

帰つてお出。親御は逢つたら、夜でもすぐはお母様家へ戻るのでよ。

あすよなつてから、又改めお暇を願つて置るから。」

難有うございませうと、りよはお言をうけて、

女の部屋へお出。

りよは比賣生つても、と云つて、

のあと、奥の口へ覗きまゝ出た。津用を勤める時の支度で、**中**の**單**物、**黒**縹子の帯と締めてゐたのである。りよは、**奥の口**で
支度**の**文吉と顔を見合せた。そして親の病氣が口實だと之を
ことを悟つた。

りよと一しよは奥を下がつた。信濃が二入物珍らげに廊下
に集まうと、りよが宿の使は逢ふのを見ようとしてゐる。

「ちよいと忘物をいたし来たわ」と、りよは獨言のやうに云つて、

50

足を早めて部屋へ引き返した。

部屋の土を内から締めた。りよは、葛竹籠の蓋を開けた。先づ取
り出したのは着換の帷子一枚である。次は、**次**の**隙**を**す**つと底
中ぐさを入れて、短刀を一本取り出した。當番の夜父三右衛
門が持つてゐた**脚**差である。りよは二品を手早く袂紗子
包んで持つて出た。

あきら

かたき

えき

はら

文吉は途中で敵と掴まらされた。りよよは、護持院原へ来た。

りよよは九郎右衛門に挨拶して、此場に着換をする。餘裕はないので、短刀だけを包の中から取り出した。

九郎右衛門は敵と言った。「そよ来たのが三右衛門の娘だよ。三右衛門を殺した事と、自分の母所名前をそこで言へ。」

敵は顔を見上げてりよよを見た。そして言った。「わたしももうこれ中をだ。本當の事を言ひます。なる程山本さん、剣を附けた

51

のはわらだが、殺しはしません。勝負事は負けて金に困つたものですわう、どうかして金が取りたいと思つて、あんなへまな事をし

た。わたしは泉州生田郡上野原村の吉兵衛と云ふものの倅で、名は虎藏と云ひます。酒井權使は任み込む時、勝負事で織

合子あつてゐた紀州の龜藏と云ふ奴の名を、口から出任せよ言つたのをす。此外は言ふことはありません。どうぞ御存命はなす

つて下さい。

よく言つた。と九郎右衛門は答へた。そりよと文吉とよ
め
目くはせ~~し~~と^{上戸藏}の縄を解いた。三人が三角から~~ひりり~~

と詰め寄つた。

縄をほどめて、しよんぼり立つてゐた虎藏が、物とねふ
のやうに骨を前座にしたと思ふと、突然りよと飛び掛つて、押し
倒して逃げようとした。


其時りよは^は下がり、^{つか}欄を握つてゐた短刀で、^た打ち虎
藏を切つた。右の肩尖から^か乳へ掛けて切り下げたのである。虎藏
52

はよろけた。りよは二太刀三太刀切つた。虎藏は倒れた。

見事ぢや。とどめは己が刺す。九郎右衛門は乗り掛つて吭
を刺した。

九郎右衛門は刀の血を虎藏の袖で拭いた。そりよは^は脚差を
拭かせた。二人共目は涙ぐんでゐた。

宇平が此場は^{おあは}居合せまふか、と、りよは只一言言つた。

九郎右衛門等三人は河岸にある、^{おは}甲冑守^いの^よか^か  頁返り

番所は届け出た。番組西丸御小納戸鶴殿吉之丞の家来王
木勝三郎組合の一番人が南き取つた。本多から大目附子届け
た。上番所組合遠藤但馬守胤統から酒井雅忠の留守庄
へ知らせた。

酒井家から役人が来て、三人の口書を取つて雅忠忠實子復命
した。

翌十四日の朝は蔭持院原一ぱいの見物人である。敵を討つた
三人の周囲は山本家の親戚が追々駆け附けた。三人は鶴殿家

から旨と生菓子とを贈つた。

西の下刻一西丸目附徒士頭十五番組水野采女の指図で、西丸徒
目附永井龜次郎、久保田英次郎、西丸小目附平岡唯八郎、井上又

八、使之者志母各金左衛門、伊丹長次郎、黒鉄之者四人が出
張した。それより本多家、遠藤家、平岡家、鶴殿家の出役がある

て、先づ人の體、衣類、持物、手剣の有無を取り調べた。剣は誰
も負つてゐない。次は永井、久保田、兩徒目附に當てた口書を取つ

つぎ 一 ぬい 十人か さいりけ まい

た。次子死骸の見合をいた。酒井家は奉公した左衛門の

藏に於て文書に載せられた剣はかうである。北月中左之方一

程突劍一箇所、剣口腫より深さ相知不申、領子切劍一箇所、

長さ三寸程、深さ二寸程、同所下之方一長さ一寸五分程、深さ六

左耳之切劍一箇所、深さ一寸、深さ六分程、右之袖より乳へ掛

程切劍一箇所、深さ四寸程、同所脇肩、深さ二寸、深さ一寸程切劍一箇所、

咽突劍一箇所、深さ三寸程、都合七箇所。衣類は木綿草物、

博多帯、持物は手拭一箇所である。死骸は玉木膳三郎子預け

53

られた。次子呼び出されて、龜藏の口入、神人右衛門所代地當

士屋治三郎、同五人組、龜藏の下請宿若狭屋龜吉が口書を取ら

れた。次子九郎右衛門等の口書と取りつたは番人が口書を取られた。

見合の役人は成の上刻より引き上げた。見合が済んで、龜藏吉之丞

あり西丸目附松本助之丞へ、酒井家御守居庄野慈父右衛門より酒井

家目附へ、酒井家御守居庄野大久保加賀守忠貞へ任けた。

十五日卯の下刻、野采女の指図、庄野へ九郎右衛門

九郎右衛門よりよとと載せられた。

等三人を引き度された。前晩酉の刻から酒井家で立た二挺
の乗物は、辻番所へ来て控へておたのである。りよは九郎右衛

門、文吉は本多某み、りよは神産子預けられた。

此日酉の下刻は町奉行筒井伊賀守政憲が九郎右衛門等三人

と呼びおいた。酒井家めらは目附、下目附、足輕小頭は足輕と

添へて、乗物に乗つた二と徒歩の文吉とと警固した。三人は筒井

政憲直の取調を受けて下がったのは、成の下刻であつた。

十六日は筒井から再度の呼出が来た。酉の下刻は與力仁移

八右衛門の取調を受けて、口書を出した。

此日よりよは酒井龜之進から、三右衛門の未亡人へは大澤右某

井井から、願ふ依つて嗽を遣された。りよが元の主人細川家から、

敵討の祝儀と言つてよこした。

十九日は筒井から三度目の呼出が来た。九郎右衛門等三人は

口書下書を讀み聞せられて、成の下刻は引き取つた。

二十三日は筒井から四度目の呼出が来た。口書清書は實

印、瓜印をさすられた。

二十八日、筒井あや五度目の呼出が来た。用番老中水野越前守忠邦の沙汰で、九郎右衛門、りよは奇特之儀子付構をし、

文吉は「仔細無之、構なき」と申し渡された。それより筒井の詞を受けて西の下刻より引き取った。

平常通心浮べしと、九郎右衛門、りよ、文吉の三人は連書な。九郎右衛門、りよは天保五年二月に買った御判物を大目附に納めた。

七月朔日はりよは酒井家の御用召があつた。辰の下刻

子親成山

本平作、櫻井須磨右衛門が麻上下で附き添つて、御用部屋に出た。

家老河合小太郎は、大目附が陪席して申渡した。女性をれば

別して御賞美あり、三右衛門の家名相續御被仰附、家行十四人扶

持被下置、追て相應の者婿養子御被仰附、又所日中奥御目

見え御被仰附と云ふのである。

十一日よりよは中奥御目見に出で、御紋付黒縮緬、紅裏真綿添

白羽二重一重、外葉子が出た。同じ日よ

濱町後室、結締緬一反、賜けられた。同じ所

57

④ 専事院 御目見とと、蘇と下され 高砂染縮緬

第一、第二本、包之内を賜げられた。

九郎右衛門が事、就ては、酒井忠勝、わう家老本多意氣揚

へ、「九郎右衛門は何の思召も無之、以前之通可召出、且行仕候段

満足寝美可致、別段之思召を以て御紋附麻上下被下置」と云ふ

沙汰があつた。本多は九郎右衛門、西石南、遣つて、用

上席より、りよへも本多の反物代千疋が、本多の母の

「まぢりめん、はくませぎなふ」と、縮緬一反、交者一折が、と贈つた。

58

文吉は酒井家の目附役所を呼び出されて、元表小使、山本九

郎右衛門家来と云ふ資格で、「格段骨折奇特に附、小役人格子

被召抱、御宛行金四両二人扶持被下道」と達せられた。それ

苗字を深中と名告つて、酒井家の下邸築館の山番を勤めた。

此敵討のあつた時、屋代太郎弘賢は七十八歳で、九郎右衛門、り

よ、常美の歌を贈つた。又もあらじ魂祭るとふ折に逢ひ

て父兄の仇討ちしたぐひば、幸は太田七左衛門が死んで

たのむ

かじり
たのむ
ハロイを
作つて
屋代を
挿
挿
子
の
も

段
ノ
キ

ほ
ろ
の
ま
た

57
4
4

